

「星の王子さま」日本語訳対照研究——*sérieux* の訳語をめぐって

志村響（フランス語教師）

アントワヌ・ドゥ・サン＝テグジュペリ不朽の児童文学作品 *Le Petit Prince* を『星の王子さま』（岩波書店、1953年）というタイトルで日本に広めたのは、最初の訳者となった内藤濯^{あろう}である。世界中で多くの言語に翻訳されていることでも知られているが、たとえば英語では *The Little Prince*、イタリア語では *Il Piccolo Principe* など、逐語訳による題名が多い。「星の」というキャッチーな言葉を冠したことが、この物語が日本において異例の人気を獲得する一助となったのは間違いないだろう。実際、2005年に岩波書店の翻訳権が消失した後、多数の新訳が出版されたが、その多くが「星の王子さま」というタイトルを踏襲している。

タイトルのみならず、この物語においてはいくつかのキーワードと呼びうる単語群があるが、その訳し方は一様ではない。最初に思い浮かぶのはキツネの台詞に頻出する動詞 *apprivoiser* であろう。「飼い慣らす」「手なずける」「なつかせる」「なじみになる」などの訳語が充てられるが、いずれも日本語の文脈に自然に落とし込むのは難しい表現である。ただ、*apprivoiser* に関しては使用箇所も限定的であり、ほとんどキツネのみが口にする単語であることから、彼の口癖のようなものと捉えることもできる。あえて「飼い慣らす」のようなゴワゴワとした感触の訳語を充てることで、日本語本来の使用にはない原文の息遣いを残すことも可能だろう。

筆者自らが *Le Petit Prince* の全訳を試みたが、*apprivoiser* を措いてもっとも訳し難かった単語が *sérieux* である。この形容詞は作中で合計21回使用される（*sérieuse, sérieuses* など男女単複数形すべて含める。副詞形 *sérieusement* の使用はない）が、*apprivoiser* の例とは異なり、主人公であるパイロットによる語り（地の文）、パイロットと王子さまそれぞれの台詞、そして四番目の星の住人であるビジネスマンの台詞の中に多数登場する。キーワードである以上できる限り訳語を統一するのが望ましいが、これだけ使用場面が多岐にわたるとほとんど不可能と断言していい。実際、既出の日本語訳を見比べてみても、その訳し方にはかなりのばらつきがあることがわかる。それらを比較検証することで *sérieux* という語の輪郭を浮かび上がらせ、日本語においてどういった意味を持ちうるのか、また、場面に応じてどんな訳語が適切なのかを論じたい。

今回参照するのは以下の日本語訳である。

- 内藤濯 訳『星の王子さま』、岩波書店、1962年
- 小島俊明 訳『新訳 星の王子さま』、中央公論新社、2005年
- 三野博司 訳『星の王子さま』、論創社、2005年
- 山崎庸一郎 訳『小さな王子さま』、みすず書房、2005年
- 池澤夏樹 訳『星の王子さま』、集英社、2005年
- 稲垣直樹 訳『星の王子さま』、平凡社、2006年
- 河野万里子 訳『星の王子さま』、新潮社、2006年
- 河原泰則 訳『小さな星の王子さま』、春秋社、2006年

野崎敏 訳『ちいさな王子』、光文社、2006年

また、フランス語原文としては、Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince*, Paris: Gallimard, 1946/1999の版を底本とする。

1. sérieux の語義

具体的な検証に移る前に、形容詞 sérieux の意味を確認したい。

まずフランス語での語義を見ると、TLFi¹によれば以下のようなになる（日本語訳は筆者による）。

A.

[人物について] 重要な物事に関心を持つさま；慎重かつ丁寧に事に当たるさま (Qui s'intéresse aux choses importantes; se montre réfléchi et soigneux dans ce qu'il fait.)

[事物、とりわけ制作物、研究について] 入念になされた (Qui est accompli avec application et réflexion.)

B.

[人物について] 頼りになる；信用に値する (Sur qui on peut compter; digne de confiance.)

[集団について] 信頼することのできる (À qui on peut faire confiance.)

[感情、心情の結びつきについて] 深く持続する、よって確かな (Qui est sûr parce qu'il est profond et durable.)

[疑問文や感嘆文において] Alors, c'est sérieux? 本当なの？ 嘘はなく、考慮に値するの？ (Est-ce vrai? Est-ce sincère, digne d'être pris en considération?)

(特殊) 性的ふるまいにおいて慎重な (Qui est réservé dans son comportement amoureux.)

C.

[人物について] 少しの陽気さも見せない (Qui ne manifeste aucune gaieté.)

D.

[事物について]

a. その重要性ゆえに考慮に値する (Qui mérite d'être pris en considération en raison de son importance.)

b. その強度、質的および量的な大きさによって重要な；大きな、重要な (Qui compte par son intensité, son importance qualitative, quantitative; de taille, d'importance.)

c. 重要なテーマに関わる (Qui concerne un sujet important.)

このうち、とりわけ D において important（あるいはその名詞形 importance）が語義の説明に多用されている。この語はそれ自体、*Le Petit Prince* における重要なキーワードの一つである。

これに対し、日本語における意味について『仏和大辞典 dictionnaire général français-japonais²』を参照

¹ <https://www.cnrtl.fr/definition/s%C3%A9rieux>（参照：2023年1月4日）

² 伊吹武彦・渡辺明正・後藤敏雄・本城格・大橋保夫 編『仏和大辞典』第5刷、白水社、1991年、2274頁。

すると、訳語として挙げられているだけでも以下のような種類がある。

- ◆（軽薄でなく物事に十分心を用いる）まじめ〔勤厳〕な、思慮のある、勤勉な、熱心な、信頼のおける、堅実な、品行方正な、操が堅い、誠意をこめて（十分心を用いて）なされた、誠実な、しっかりした、熱のこもった
- ◆ 堅苦しい、いかめしい、にこりもしない、地味な
- ◆ 本気の、真剣な、軽視できない、大事な、憂慮すべき、深刻な、（質的・量的に）かなりの、確固たる、立派な

また、『ディコ仏和辞典³』には以下のような訳語が載っている。

sérieux,se

- ① まじめな；真剣な、本気の；品行方正な
- ② 信用できる、あてになる、確かな
- ③ 重大な、深刻な
- ④（量が）かなりの；（根拠が）充分な
- ⑤（仕事などが）入念な、誠実な；（本などが）堅い内容の

2. 「まじめな」という訳語の畏

訳者の一人である三野博司は「訳者あとがき⁴」の中で以下のように述べている。

同時に、キーワードのくりかえしもまた多い。とりわけキツネの教訓（21）の中に多く見られるが、それらに文脈に応じた別の訳語をあててしまうと、著者の意図が十分に伝わらないおそれがある。そのため翻訳にあたっては、可能なかぎり同一の訳語をあてることにした。「sérieux まじめな」「essentiel いちばん大切な」「important 大事な」「apprivoiser 手なずける」「créer des liens 絆をつくる」「unique au monde この世でただ一つの」などである。このうち、「sérieux まじめな」は、おとなたちを揶揄する意味合いをこめて使われる場合が多く、それこそこれを「まじめに」受けとってよいのかどうかを疑う必要があるが、しかし、そうした揶揄のニュアンスをもたない場合もある。

実際、三野の翻訳を見ると、他の訳者に比べて「まじめな」という訳語の登場回数が多い。これは上記の「可能なかぎり同一の訳語をあてる」姿勢を貫いた結果であろう。しかし、それではなぜ他の訳者はそうしなかったのか。おそらく三野と同じように *sérieux* をキーワードの一つと捉えていたであろうにもかかわらず、なぜ一貫性を犠牲にして、場面に応じて異なる訳語を選ぶに至ったのか。それはまさに三野が言及するところの「おとなたちを揶揄する意味合い」を表現するにあたって、原語の

³ 中條屋進・丸山義博・G.メランベルジェ・吉川一義 編『ディコ仏和辞典』第3版第4刷、白水社、2003年、1435頁。

⁴ 三野博司 訳『星の王子さま』、論創社、2005年、139頁。

sérieux とその訳語「まじめな」の間にズレが生じてしまうからであろう。

3. *Le Petit Prince* における sérieux の登場シーン

27 章から成る本作において、sérieux という語は合計 21 回使用される。

献辞 (dédicace)	1 回
1 章	1 回
2 章	1 回
3 章	1 回
4 章	1 回
5-6 章	0 回
7 章	6 回
8 章	1 回
9-12 章	0 回
13 章	7 回
14-25 章	0 回
26 章	2 回
27 章	0 回

以上を見ると、とりわけ 7 章と 13 章において sérieux の使用頻度が高いことがわかる (7 章 6 回、13 章 7 回)。その他の章ではほとんどが 1 回のみの使用、26 章では 2 回使用されている。

1) 1 章、2 章 —— sérieux の両極

物語本文中でこの単語が最初に使用されるのは 1 章後半、主人公であるパイロットによる語りの部分である。

J'ai ainsi eu, au cours de ma vie, des tas de contacts avec des tas de gens sérieux. J'ai beaucoup vécu chez les grandes personnes. Je les ai vues de très près. Ça n'a pas trop amélioré mon opinion. (p. 14)

内藤濯 (以下、内藤) 訳：ぼくは、そんなことで、そうこうしているうちに、たくさんのえらい人たちと、あきるほど近づきになりました。(p. 9)

小島俊明 (以下、小島) 訳：こんなふう生きていくうちに、沢山の信頼できる人と会いました。(p. 9)

三野博司 (以下、三野) 訳：こうして、僕の人生において、たくさんのまじめな人々と出会うた くさんの機会を得た。(p. 8)

山崎庸一郎 (以下、山崎) 訳：こうしてわたしは、これまで、多くのまともそうな人びとと多くの交際を持つことになりました。(p. 8)

池澤夏樹（以下、池澤）訳：そうやって暮らしていく中で、ぼくはたくさん重要人物に会うことになった。(p. 9)

稲垣直樹（以下、稲垣）訳：というわけで、これまで生きてきて、ぼくはなんともたくさんいっぱしのおとなたちと、なんともたくさんの付き合いをしました。(p. 9)

河野万里子（以下、河野）訳：そんなふう生きてきたなかで、僕はいわゆる有能な人たちと、ずいぶんつきあってきた。(p. 9)

河原泰則（以下、河原）訳：さて、そんな人生をおくるうち僕は、いちおう身分も地位もある人たちと、つまり、世間で言う《ひとかどの》人たちと、たくさん知り合いになりました。(p. 11)

野崎歓（以下、野崎）訳：そんなわけで、生きていくうちに、まじめな人たちとお会いする機会が山ほどあった。(p. 10)

取り上げた9人の中で「まじめな」という訳語を選択したのは三野、野崎の2人のみ。そのほか内藤「えらい」、小島「信頼できる」、山崎「まともそうな」、池澤「重要（人物）」、稲垣「いっぱしのおとなたち」、河野「有能な」と分かれるが、河原にいたっては「いちおう身分も地位もある」「世間で言う《ひとかどの》」と一つの訳語に限定することを放棄している。

次の2章ではパイロットと王子さまとの会話の最中、地の文に *sérieux* という語が見つかる。

Quand je réussis enfin à parler, je lui dis :

« Mais... qu'est-ce que tu fais là ? »

Et il me répéta alors, tout doucement, comme une chose très sérieuse : (p. 16)

内藤：すると、ぼっちゃん、とてもだいじなことのように、たいそうゆっくり、くりかえしました。(p. 12)

小島：すると彼は、とても重大なことのように、実に物静かに繰り返しました。(p. 12)

三野：すると、彼はとても重大なことを告げるかのように、静かに、くりかえした。(p. 12)

山崎：すると相手は、とても大切なことのように、ゆっくりと繰り返したのです。(p. 10)

池澤：それに対して彼は、とても重要なことを告げるように静かな声で繰り返した。(p. 12)

稲垣：すると、その子は小声でまた同じことを繰り返しました、なにやら、とても大事なことみたいな口調で。(p. 13)

河野：でもその子は、なにか重大なことのように、静かな声でそつとくり返すだけだった。(p. 12)

河原：でもその子は、これはとても大事なことなんだというふうな真剣なまなざしで、ゆっくりと、おなじことを言うのでした。(p. 16)

野崎：すると坊やは、とても大事なことなんだというふうに、落ち着いた口調でくりかえした。(p. 14)

ここでは「大事（だいじ）な」という訳語を選択したのが内藤、稲垣、河原、野崎の4人と最も多い。次いで「重大な」が小島、三野、河野の3人。残りは山崎が「大切な」、池澤が「重要な」と訳

している。このうち池澤のみが1章 «*des tas de gens sérieux*» と同一の訳語を用いており、意図的に訳語を統一しているであろうことが推察できる。

また、ここでも河原は一語での翻訳を放棄し、「真剣なまなざしで」という文言を追加している。訳文の是非はともかく、おそらく *sérieux* という語の多義性と向き合った上で、一語では捉え切れないニュアンスを日本語で漏れなく表現しようとした結果なのだろう。そうした姿勢は河原訳のタイトル『小さな星の王子さま』からも窺える。内藤の発明である「星の」と *petit* の訳語にあたる「小さな」を重ねて用いているのは河原のみである。

いずれにしてもここでは「まじめな」に類する訳語（「まとも」「まっとう」など）を選択した者はおらず、ほとんどが *sérieux* を *important* の同義語として訳している。以後、*sérieux* の訳語群をおおまかに類型化するために、「まじめな」「まともな」「まっとうな」「真剣な」などの語を【まじめな型】（『ディコ仏和辞典』語義①に相当）、「大事な」「大切な」「重大な」「重要な」などの語を【大事な型】（同上③に相当）と称する。

2) 3章、8章 —— 熟語表現における *sérieux*

3章では、王子さまにその災難を笑われたパイロットの語りの中で *sérieux* が使用される。

Et le petit prince eut un très joli éclat de rire qui m'irrita beaucoup. Je désire que l'on prenne mes malheurs au sérieux. Puis il ajouta :

« Alors, toi aussi tu viens du ciel ! De quelle planète es-tu ? » (p. 20)

内藤：天から落ちるなんて、ありがたくないことなんですから、しんけんに考えてもらいたかったのです。(p.16)

小島：ぼくに降りかかった不慮の災難を、深刻に受けとめて欲しかったのです。(p. 15)

三野：その時、僕がどれほど情けない気持ちだったか、君たちに真剣に考えてほしいものだ。(p. 16)

山崎：ひとの災難はまじめに受け取ってもらいたいのです。(p. 14)

池澤：ぼくとしては自分の不運をもう少し真剣に受け止めてほしかったのだ。(p. 15)

稲垣：ぼくの身に降りかかった不幸を、ぼくはまじめに受けとめてもらいたいのです。(p. 19)

河野：不時着という災難は、まともにとってほしかったのだ。(p. 18)

河原：砂漠のまんなかにな不時着しなきゃいけなかったという不幸を、すこしは僕の身になって考えてほしかったからです。(p. 21)

野崎：人の不幸を笑ってほしくはない。(p. 19)

ここでは「まじめに」（山崎、稲垣の2人）、「真剣（しんけん）に」（内藤、三野、池澤の3人）が複数の訳者によって選ばれた。河野の「まとも」を加えれば過半数が【まじめな型】の語を採用していることがわかる。対して小島の「深刻に」はフランス語では *grave* の語義に近く、【大事な型】に属する訳語と言えるだろう。野崎の「笑ってほしくはない」は一見どちらとも言えないが、「本気

にしてほしい」と読み替えるのであれば【まじめな型】に分類することも可能かもしれない。河原はここでも異色で、他の訳者とは一線を画す訳し方をしている。

また、ここでは « prendre au sérieux » という熟語表現として使われていることにも着目したい。Wiktionnaire⁵でその意味を確認すると、

Considérer une personne ou une chose comme importante ou méritant attention, dans un contexte où ce ne serait peut-être pas le premier mouvement.

「ある人や物事を、たとえそれがまっさきに行くべきことではないにせよ、重要あるいは注意に値するものとして捉えること」（訳は筆者）

とある。この点を鑑みれば、河原訳「僕の身になって」は少し踏み込んだ解釈だと言えよう。

« prendre au sérieux » は 8 章で再び登場する。

Ainsi le petit prince, malgré la bonne volonté de son amour, avait vite douté d'elle. Il avait pris au sérieux des mots sans importance, et était devenu très malheureux. (p. 37)

内藤：花がなんでもなくいったことを、まじめにうけて、王子さまは、なさけなくなりました。(p. 42)

小島：なんでもない言葉をまじめにとって、とてもみじめになったのでした。(p. 37)

三野：それに、なんでもないことばをまじめに受け取って、そのことでたいそう苦しんだ。(p. 43)

山崎：なんでもない言葉も真に受けて、とてもふしあわせになってしまいました。(p. 31)

池澤：あまり意味のない言葉をいちいち真剣に受け止めては辛い思いをした。(p. 39)

稲垣：取るに足らない言葉を深刻に受けとめ、王子さまはたいそうみじめな気持ちになっていきました。(p. 52)

河野：気まぐれなことばを真に受けては、とてもみじめな気持ちに落ちこんでいた。(p. 44)

河原：彼は、彼女が口先で言うことをなんでもそのまま真に受けてしまったのです。王子さまにとって、不幸な日々がはじまりました。(p. 52)

野崎：なんでもない言葉を真にうけたりして、とてもふしあわせになってしまったんだ。(p. 48)

ここでも内藤、小島、三野の3人が「まじめに」と訳しているが、山崎、河野、河原、野崎の4人が「真に（受ける）」という訳語を用いている。「prendre au sérieux」が成句である以上、日本語においても定型表現が使用されることは頷けるだろう。「真」を【まじめな型】に含めるとすれば、池澤の「真剣に」と合わせて8人が【まじめな型】を選択している。稲垣「深刻に」は3章の小島訳と同様、【大事な型】に分類できるだろう。

⁵ https://fr.wiktionary.org/wiki/prendre_au_s%C3%A9rieux (参照：2023年1月4日)

いずれにしても « *prendre au sérieux* » のような成句表現では訳のばらつきは比較的少ないことがわかった。これはコロケーション（慣用的な語の組み合わせ）のおかげで、ある語が単体で用いられた場合に比べ置かれた文脈によって被る意味の変容の度合いが小さいからだと推測できる。

3) 4章、献辞 —— 第三の型

4章冒頭に *sérieux* が用いられる場面がある。

J'ai de *sérieuses* raisons de croire que la planète d'où venait le petit prince est l'astéroïde B 612. Cet astéroïde n'a été aperçu qu'une fois au télescope, en 1909, par un astronome turc. (p. 23)

内藤：ぼくは、王子さまのふるさとの星は、小惑星、B-612 番だと思っているのですが、そう思うのには、ちゃんとしたわけがあります。(p. 20)

小島：ぼくには、王子さまの故郷の星が小惑星 B612 番であると信ずるに足るたしかな理由があります。(p. 19)

三野：確かな理由があつて言うのだが、王子さまの星は小惑星 B612 だと思ふ。(p. 20)

山崎：わたしには、小さな王子さまの故郷の星は小惑星 B612 だと信じるだけのちゃんとした理由があります。(p. 17)

池澤：ぼくには、王子さまが来た星が B612 という小惑星だと信じるちゃんとした理由がある。(p. 19)

稲垣：ぼくは王子さまの故郷の星が、小惑星 B612 だとにらんでいるのですが、それにはちゃんとした理由があります。(p. 24)

河野：王子さまがやってきた星は、小惑星 B612 だろうと僕は思う。たしかな理由がいくつかあるのだ。(p. 22)

河原：じつは僕には、王子さまのふるさとが小惑星 B-612 じゃないかと思う、たしかな理由があります。(p. 25)

野崎：ちいさな王子が住んでいた星は、小惑星 B612 ではないか。思い当たるふしがあった。(p. 23)

ここでは内藤、山崎、池澤、稲垣の4人が「ちゃんとした」、小島、三野、河野、河原の4人が「確(たし)かな」と訳している。とくに後者は【まじめな型】にも【大事な型】にも含め難いもので、【確かな型】(『ディコ仏和辞典』語義②、④に相当)と新たな類型を設けた方がいいだろう。では「ちゃんとした」はどの型に含めるべきだろうか。「ちゃんと」という語に関して、『岩波国語辞典⁶』によれば「「連体修飾の「一した」の形でまともな」という語義を確認できる。「まともな」と同義であるのならば、【まじめな型】に入れることも可能だろう。一方、『新明解国語辞典⁷』には「何

⁶ 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子 編『岩波国語辞典』第8版、岩波書店、2019年、982頁。

⁷ 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 編『新明解

かを根拠として、そのことが疑う余地のないことだという確信をいただく様子」とある。この点では、【確かな型】に入れるのが妥当かもしれない。後ろに続く名詞「理由／わけ」との共起関係を考慮してここでは【確かな型】に含めることにするが、この類型は訳者それぞれの訳語の選出に関わる傾向をおおまかに把握するためのもので、単語によっては二つの型の間あるいはその両方に位置するようなことも十分考えられる。

野崎訳「思い当たるふし（があった）」は «*sérieuses*» を適切に訳出できていないだけでなく、全体としても意味が弱まってしまうので、不適切な訳である。

本作において *sérieux* が【確かな型】で訳されるのは4章が最初ではない。物語が始まる前の献辞においても既に一度登場している。

Je demande pardon aux enfants d'avoir dédié ce livre à une grande personne. J'ai une excuse sérieuse : cette grande personne est le meilleur ami que j'ai au monde. (p. 11)

内藤：でも、それには、ちゃんとした言いわけがある。(p. 5)

小島：それにはまじめなわけがあるのです。(p. 5)

三野：だが、僕には確かな言い訳があるのだ。(p. 5)

山崎：わたしにはちゃんとした言いわけがある。(p. 5)

池澤：大事な理由があるのだ。(p. 5)

稲垣：それには、れっきとした理由があるからです。(p. 5)

河野：なにしろ大事なわけがある。(p. 5)

河原：ただ、僕がそうしたのにはちゃんとした理由があつて、(p. 6)

野崎：それには重大なわけがある。(p. 5)

「ちゃんとした」と訳したのが内藤、山崎、河原の3人。三野の「確かな」と合わせて4人が【確かな型】の訳語を採用している。そのほか池澤、河野、野崎の3人が【大事な型】、小島は唯一【まじめな型】で訳している。

稲垣訳「れっきとした」はここでしか用いられないが、どの型に含めるべきか判断が難しい。「周囲から、その存在がはっきりと認められ、重んじられている様子」（『新明解国語辞典』第7版、p. 1611）という説明を見れば【大事な型】に含められそうだが、一概にそうとも言えない。

4) 7章、13章 — *sérieux* と *important*

ここまでいくつかの使用例を見てきて *sérieux* の訳のばらつきには程度の差があることがわかったが、*Le Petit Prince* においてもっとも多くこの語が使用されるのは7章と13章である。構成上の前後関係としては7章が先ではあるが、時間軸としては13章の出来事が先行しており、それが7章の会話の中で想起されるという形になっている。

国語辞典』第7版、三省堂、2012年、966頁。

Je ne répondis rien. À cet instant-là je me disais : « Si ce boulon résiste encore, je le ferai sauter d'un coup de marteau. » Le petit prince déranga de nouveau mes réflexions :

« Et tu crois, toi, que les fleurs...

.. Mais non ! Mais non ! Je ne crois rien ! J'ai répondu n'importe quoi. Je m'occupe moi, de choses sérieuses ! »

Il me regarda stupéfait.

« De choses sérieuses ! » (p. 32)

内藤：「ちがうよ、ちがうよ、ぼく、なんとも思ってやしないよ。でたらめに返事したんだ。とてもだいじなことが、頭にひっかかっているんでね」王子さまは、あつけにとられて、ぼくの顔を見ました。「なに、だいじなことって？」(p. 34)

小島：「違うよ、違うよ！何とも思っちゃいないよ。いいかげんに返事しただけさ。ぼくはね、深刻な事態に直面してるんだよ」王子さまは、唾然として、ぼくを見つめました。「深刻な事態だって！」(p. 31)

三野：「そうじゃない！そうじゃないよ！僕は何も考えていないよ！でまかせに答えたんだ。僕はいま、まじめなことに取り組んでいるんだ！」彼はびっくりして、僕を見つめた。「まじめなことだって！」(p. 35)

山崎：「ちがう！ちがうよ！なにも思っちゃいない！あてずっぽうに答えたただけだ。わたしはね、まじめなことに一所懸命なんだ！」彼はびっくりしてわたしを見ました。「まじめなことだって！」(p. 26)

池澤：「ちがう、ちがう。ぼくは何も考えていないよ。いいかげんなことを言っただけさ。ほら、とても重要なことで頭がいっぱいだからね」彼はびっくりしたような目でぼくを見た。「とても重要なこと！」(p. 32)

稲垣：「いやいや、とんでもない！ぼくはなんにも思っちゃいないんだ！ぼくは口から出任せを答えたただけなんだ。ぼくはまじめなことで手いっぱいなんだよ」あつけにとられて、王子さまはぼくを見ました。「まじめなことだって！」(p. 42)

河野：「いや！ちがう！僕は何にも思ってやしない！てきとうに答えたただけだ。大事なことで、忙しいんだ、僕は！」王子さまは、ぼう然としてこちらを見つめた。「大事なこと！」(p. 37)

河原：「ちがう、ちがう。僕はなんにもそんなこと思ってやしない。ただいいかげんに返事しただけさ。僕はね、今大事なことでいそがしいんだよ」「大事なことだって？」王子さまはびっくりした表情で僕を見ました。(p. 43)

野崎：「ちがう、ちがう！なんにも思ってなんかいないよ。さっきはでたらめをいっただけさ。なにしろいまは、大事な用があるんだから」王子はびっくりしてぼくを見た。「大事な用だって！」(p. 39)

7章においてパイロットと王子さまが口論になる場面だが、内藤、河野、河原が「大事（だいじ）なこと」、小島が「深刻な事態」、池澤が「重要なこと」、野崎が「大事な用」といずれも【**大事な型**】

の訳語を用いている。対して三野、山崎、稲垣が共通して「まじめなこと」と訳している。比率としては【大事な型】が6人、【まじめな型】が3人である。

« Je connais une planète où il y a un monsieur cramoisi. Il n'a jamais respiré une fleur. Il n'a jamais regardé une étoile. Il n'a jamais aimé personne. Il n'a jamais rien fait d'autre que des additions. Et toute la journée il répète comme toi : "Je suis un homme sérieux ! Je suis un homme sérieux !", et ça le fait gonfler d'orgueil. Mais ce n'est pas un homme, c'est un champignon ! (p. 33)

内藤：そして日がな一日、きみみたいに、いそがしい、いそがしい、と口ぐせにいいながら、いばりくさってるんだ。(p. 35)

小島：そして、日がな一日、きみのように繰り返しているんだ。自分は真面目な人だ、真面目な人だ、って！思い上がりもいいところだ。(p. 32)

三野：それで一日中、きみのようにくりかえしているんだ。〈おれはまじめな男だ！おれはまじめな男だ！〉ってね。それで得意満面、大きな顔をしている。(p. 36)

山崎：そして、日がな一日、あなたみたいに繰り返している。〈わたしはまじめな人間だ！わたしはまじめな人間だ！〉って。そう言ってふんぞり返っているんだ。(p. 27)

池澤：1日に何度も何度もその人はきみみたいに言うんだ——『私はとても重要な人物だ！』って。見栄ですっかりふくらんじゃってる。(p. 32)

稲垣：朝から晩まで、君と同じことをのべつ幕なしに言っている。『ぼくはまじめな人間だ！まじめな人間だ！』ってね。そんなことばかり言っているものだから、ふくれあがって自尊心のかたまりになっちゃったんだよ。(p. 44)

河野：一日じゅう、きみみたいにくりかえしてた。『大事なことで忙しい！私は有能な人間だから！』
そうしてふんぞり返ってた。(p. 38)

河原：そして朝から晩まで、きみみたいに、《おれは大事な仕事をしてるまっとうな人間だ！ああ忙しい忙しい！》って言いながらうぬぼれ上がってるんだ。(p. 44)

野崎：そのおじさんが一日じゅう、きみみたいにくりかえしいってるんだ。『大事な用がある！大事な用がある！』
そういつて、ずいぶん偉そうにしているのさ。(p. 40)

ここで訳の分岐がはっきり目立つようになる。sérieux の訳出が本格的に難しくなっていることの表れだろう。まず、王子さまの台詞の中で引用される « Je suis un homme sérieux ! » が先述のパイロットの台詞 « Je m'occupe, moi, de choses sérieuses ! » と明らかに呼応していることを理解しなければならない。本文中でも十行余りしか離れておらず、その間に王子さまが口にした言葉は他に « Tu parles comme les grandes personnes ! (きみは大人みたいな話し方をする !) » (p. 32) および « Tu confonds tout... tu mélanges tout ! (きみは何もわかってない...きみは全部ごっちゃにしてる !) » (p. 32) の二つ⁸である。ヒツジが花を食べてしまうのではないかという王子さまの心配をよそに油まみれの手で飛行機修理に取り掛かり、花がトゲをつけるのは花が意地悪だからだとおざなりなことを言った挙句、自分がやら

⁸ いずれも筆者訳。以下、本文引用箇所の和訳はとくに断りがなければ筆者自身によるものである。

なければならないことを «*sérieuses*» だと言い放ったパイロットに対し王子さまが幻滅し、怒りを露わにしているのだ。

そこで引き合いに出されるのが «*un monsieur cramoisi*» (赤顔おじさん) であり、これは13章に登場する «*businessman*» を指している。そしてたし算しかしたことがなく⁹、他には何もわからないその男の口癖だった «*sérieux*» をパイロットが口にしたことで、「赤顔おじさん=愚かな大人」とパイロットを同一視し、あまつさえ軽蔑しているのである。

よって本来、パイロットと「赤顔おじさん」が同じ言葉を使ったことを明確にするために «*Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !*» と «*Je suis un homme sérieux !*» では *sérieux* の訳語を統一することが望ましい。しかし前者では «*choses* (もの、こと)» を修飾しているのに対し、後者の被修飾語は «*homme* (ひと、男)» である。したがって «*choses sérieuses*» を「大事なこと」と訳すことはできても «*homme sérieux*» を「大事な人」とは訳しづらく、工夫が必要になる。

この二箇所の訳について9人の訳者それぞれの翻訳を見てみると、【大事な型】を選んだか【まじめな型】を選んだかによって大きく方向性が分かれていることに気付く。まずはパイロットの台詞 «*Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !*» で【大事な型】を選択した6人の訳を見てみたい。

	« <i>Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !</i> »	« <i>Je suis un homme sérieux ! Je suis un homme sérieux !</i> »
内藤	とてもだいじなことが、頭にひっかかっているでね	いそがしい、いそがしい、
小島	ぼくはね、深刻な事態に直面してるんだよ	自分は真面目な人だ、真面目な人だ、
池澤	ほら、とても重要なことで頭がいっぱいだからね	私はとても重要な人物だ！
河野	大事なことで、忙しいんだ、僕は！	大事なことで忙しい！私は有能な人間だから！
河原	僕はね、今大事なことでいそがしいんだよ	おれは大事な仕事をしてるまっとうな人間だ！ああ忙しい忙しい！
野崎	なにしろいまは、大事な用があるんだから	大事な用がある！大事な用がある！

«*choses sérieuses*» と «*homme sérieux*» をそれぞれ「大事なこと」「大事な人」と訳すのは難しいと先に述べたが、6人のうち池澤のみが前者を「とても重要なこと」、後者を「とても重要な人物」と異なる名詞を同一の形容詞とともに訳している。実際、池澤は1章でも「重要人物」、2章で「とても重要なこと」と既に訳しており、文脈の中で許容範囲を超える齟齬を来さない限り、すべて *sérieux* = 「重要な」と訳するという方針があったことが窺える。

では残りの5人はどうだろうか。まず «*Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !*» の訳を確認すると、河野、河原のそれぞれが「忙(いそが)しい」という訳語を充てている。どちらも «*choses sérieuses*»

⁹ «*Il n'a jamais rien fait d'autre que des additions.*» (p. 33)

を「大事なこと」と訳していることから、「忙しい」は「*m'occupe (, moi,) de*」の訳出と考えてよいだろう。動詞句「*s'occuper de*」は「～に従事する」という意味がある¹⁰が、「～することで忙しい」という訳は妥当である。また、*occuper* の過去分詞形 *occupé* はそのまま「忙しい」という語義を持つ形容詞でもある¹¹。興味深いのは河野、河原が両者とも「*Je suis un homme sérieux ! Je suis un homme sérieux !*」にも「忙しい」という訳語を使用していることである。ここでは *Le Petit Prince* において多用される修辞技法の一つである「反復（繰り返し）」が用いられており、日本語でも同様に同じ言い回しを繰り返すことが効果的である。しかし、河野訳「大事なことで忙しい！私は有能な人間だから！」および河原訳「おれは大事な仕事をしてるまっとうな人間だ！ああ忙しい忙しい！」では反復を用いない代わりに、「*sérieux*」を「*homme*」に係る形容詞として訳出（河野「有能な」、河原「大事な仕事をしてるまっとうな」）しつつ、片方の「*Je suis (un homme) sérieux*」を「忙しい」と訳しているのである。また、内藤は「*(Je m'occupe, moi,) de choses sérieuses !*」を「だいじなこと」と訳しながらも、「*Je suis un homme sérieux ! Je suis un homme sérieux !*」をただ「いそがしい、いそがしい」と訳している。河野、河原と異なり名詞「*homme*」の訳出はされていないが、内藤を含めた3人に共通して言えるのは「*Je suis un homme sérieux !*」をあたかも「*Je suis occupé de choses sérieuses !*」と読み替えて訳している点だろう。

そしてこれは野崎訳「大事な用がある」にもあてはまる。野崎は「*s'occuper de*」の持つ動詞的意味合い、「*homme*」の持つ名詞的意味合いを捨象する代わりに、それぞれの句の折衷案とも言える「大事な用がある」という（「忙しい」と同様いかにも大人が言いそうな）表現を用いることで、形容詞 *sérieux* をあくまで大人を揶揄するキーワードとして成り立たせているのである。

他方、小島は「*Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !*」を【大事な型】で訳している（「深刻な事態に直面してる」）にもかかわらず、「*Je suis un homme sérieux ! Je suis un homme sérieux !*」では【まじめな型】の語彙を用いている（「自分は真面目な人だ、真面目な人だ」）。反復技法の再現には成功しているが、ここでまったく意味の異なる訳語を充てることは、キーワードとしての *sérieux* の意味合いを著しく翳めてしまうことになるだろう。

次に「*Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !*」で【まじめな型】の語を選択した3人の訳を見てみたい。

	「 <i>Je m'occupe, moi, de choses sérieuses !</i> 」	「 <i>Je suis un homme sérieux ! Je suis un homme sérieux !</i> 」
三野	僕はいま、まじめなことに取り組んでいるんだ！	おれはまじめな男だ！おれはまじめな男だ！
山崎	わたしはね、まじめなことに一所懸命なんだ！	わたしはまじめな人間だ！わたしはまじめな人間だ！

¹⁰ 『ディコ仏和辞典』、1057頁。

¹¹ 同上。

稲垣	ぼくはまじめなことで手いっぱいなんだよ	ぼくはまじめな人間だ！まじめな人間だ！
----	---------------------	---------------------

多様な種類が見られた【大事な型】の訳とは対照的に « choses sérieuses » = 「まじめなこと」、« homme sérieux » = 「まじめな男／人間」としか訳されず、「m'occupe de」の訳は分かれるものの sérieux の訳語は「まじめな」で固定されている。たしかに逐語的に考えるのであればこのような訳がもっとも自然である。ではなぜ、この二箇所【まじめな型】を選んだ訳者は【大事な型】に比べ少数なのか。それはやはり sérieux には「まじめな」という訳では拾い切れないニュアンスがあり、そこで取り逃してしまうものの中にこそ、この語がキーワードとして機能する所以があるからであろう。

これは筆者の所感に過ぎないが、「まじめなこと」に従事する「まじめな人間」はむしろひたむきですらあり、対等あるいは有利な力関係において嘲笑できこそすれ、王子さまを筆頭とした小さな (petit) 存在である子ども (enfants) が大人 (grandes personnes) を揶揄する言葉としては適切ではないように思う。子どもが大人を sérieux という語を使って揶揄したり批判できるのは、彼らが「まじめ」だからでも「真剣」だからでもなく、(少なくとも王子さまの目から見れば) 他にもっと大事なことがあるにもかかわらず自らを、あるいは自らに関係する瑣末な物事を「大事」だと思い込んでいるからだろう。つまり、批判すべきものは sérieux という語自体に意味として内在するのではない。何を「sérieux = 大事」とみなすかという姿勢こそ問題なのである。

それを裏付けるように、次の使用箇所では sérieux は important と並置されている。

Et ce n'est pas sérieux de chercher à comprendre pourquoi elles se donnent tant de mal pour se fabriquer des épines qui ne servent jamais à rien ? Ce n'est pas important la guerre des moutons et des fleurs ? Ce n'est pas plus sérieux et plus important que les additions d'un gros monsieur rouge ? (p. 33)

内藤：でも、花が、なぜ、さんざ苦勞して、なんの役にも立たないトゲをつくるのか、そのわけを知ろうというのが、だいたいなことじゃないって言うのかい？ 花がヒツジにくわれることなんか、たいしたことじゃないって言うの？ ふとっちょの赤黒先生の寄せ算より、だいたいなことじゃないって言うの？ (p. 36)

小島：花がなぜ、まったく役に立たない棘を作るのにあれほど苦勞しているのかを理解しようとするのが、大事じゃないというの？ 羊と花の戦争なんか、大事じゃないというの？ ふとっちょの深紅色さんの足し算よりも、真面目でも大事でもないというの？ (p. 32)

三野：それなのに花はなぜ、なんの役にも立たないトゲを苦勞して作るのか、それを理解しようとするのが、まじめなことじゃないって言うの？ ヒツジと花の戦争は大事なことじゃないの？ 太った赤ら顔のおじさんの計算よりも、まじめで大事なことじゃないの？ (p. 36)

山崎：花たちがなんの役にも立たない棘をつけるためにひどく苦勞しているのはなぜか、それを理解しようとするのがまじめなことじゃないって言うの？ ヒツジたちと花たちのこの戦争、それが重要なことじゃないって言うの？ それがふとった赤ら顔のおじさんの足し算よりまじめなことでもなく、重要なことでもないって言うの？ (p. 27)

池澤：なのに、何の役にも立たないトゲをどうして花がわざわざ生やすのか考えるのは重要じゃ

ないって言うの？ ヒツジと花の闘いは大事じゃないの？ 太った赤い顔の男の人の計算より重要でも大事でもないって言うの？(p. 33)

稲垣：身を守るのに、なんの役にも立たないトゲを、なんで花たちはそんなに躍起になってこしらえるんだろう。そういうことを知ろうとするのは、まじめじゃないって言うのかい？ ヒツジたちと花たちの戦いは大切じゃないのかい？ 赤ら顔の太った男の金勘定と比べて、まじめでも、大切でもないって言うのかい？(p. 44)

河野：なんの役にも立たないトゲをつけるのに、どうして花があんなに苦勞するのか、それを知りたいと思うのが、大事なことじゃないって言うの？ ヒツジと花の戦いが、重要じゃないって言うの？ 赤い顔の太ったおじさんのたし算より、大事でも重要でもないって言うの？(p. 38)

河原：花がどうしてそんな役にもたたない棘をわざわざ苦勞してつけるのか、そのわけを知りたいって言うのが大事なことじゃないって言うのかい？ ヒツジと花の闘いなんかどうでもいいって言うのかい？ 赤太りおじさんの足し算のほうが、もっとまっとうで大事だとも言うつもりなのかい？(p. 44)

野崎：それでもお花がわざわざ苦勞して、なんの役にもたたないとげをつくっているのはどうしてか、そのわけを知ろうとするのは、大事なことじゃないって言うの？ ヒツジとお花のたたかいは、大事なことじゃないの？ そのほうが、赤ら顔おじさんの足し算よりも大事なことじゃないの、大変なことじゃないの？ (p. 41)

ここは *sérieux* を【大事な型】で訳し *important* の類義語として扱う方針と、*sérieux* を【まじめな型】で訳すことによって *important* とは地平を分かつ方針に大きく二分される。

前者の方針を執ったのは内藤、池澤、河野、野崎の4人である。このうち内藤は「*important*」を「たいしたこと」と訳しているものの「*plus sérieux et plus important*」は一緒くたに「だいじなこと」とし、二語の境界を有耶無耶にしている。池澤は一貫して「*sérieux*」を「重要」と訳すことによって「*important*」=「大事」との棲み分けを保障している。河野は反対に「*important*」を「重要」と訳すことにより「*sérieux*」=「大事」との訳し分けを図っている。そして野崎は「*sérieux*」、「*important*」をどちらも「大事なこと」と訳しつつ、最後の「*plus sérieux et plus important*」は「大事なことじゃないの、大変なことじゃないの」とすることで原文では二語に分かれていたという痕跡をとどめている。

後者、つまり【大事な型】と【まじめな型】を併用する方針を執ったのは残る小島、三野、山崎、稲垣、河原の5人である。このうち三野、山崎、稲垣は「*sérieux*」を「まじめ」と訳すことで「*important*」=「大事」「重要」「大切」との境界をはっきりさせている。対する小島、河原は「*sérieux*」、「*important*」の二語はそれぞれ【大事な型】で訳しているが、「*plus sérieux et plus important*」では「*sérieux*」を【まじめな型】（「真面目」「まっとう」）で訳している。河原が「*pas important*」を「どうでもいい」と訳していることにも着目したい。

しかし、ここで【大事な型】と【まじめな型】二種類の異なる語彙を混在させることは適切と言えるだろうか。13章での「*businessman*」（ビジネスマン＝赤顔おじさん）の台詞を参照したい。

	Je suis sérieux, moi, je ne m'amuse pas à des balivernes ! (p. 49)	Je n'ai pas le temps de flâner. Je suis sérieux, moi. (p. 50)	Mais je suis sérieux, moi ! Je n'ai pas le temps de rêvasser. (p. 51)	Je suis sérieux, moi, je suis précis. (p. 51)	Mais je suis un homme sérieux ! (p. 52)
内藤	おれは、だいたい仕事してるんだ。くだらんことに、かかりあっちゃおられん。(p. 60)	そこらをぶらつくひまもないんだ。おれは、これで、だいたい仕事をしてるんだからね。(p. 61)	だけど、おれは、だいたい仕事をしてるんだからねえ。かってな夢なんか、見てるひまはないよ。(p. 61)	おれはだいたい仕事をしてるんだからね、この数にまちがいはないよ。(p. 62)	しかし、おれは、ちゃんとした男だからね。(p. 64)
小島	おれは真面目に働いているんだ！無駄話をするヒマなんか無いんだ！(p. 52)	散歩をする時間が無いんだよ。おれは真剣なんだ。(p. 53)	だけど、おれは真面目に働いている。夢にふけておるヒマなど無いのだ。(p. 53)	おれは真剣なんだ。几帳面なんだ。(p. 54)	だけど、おれは真剣なんだ。(p. 55)
三野	俺はまじめなんだ。無駄話をしている暇はないんだ！(p. 62)	散歩する暇なんてないからね。まじめなんだよ、俺は。(p. 63)	だが、まじめなんだ、俺は！夢見心地になっている暇はないんだ。(p. 64)	まじめだからね、俺は。几帳面なんだよ。(p. 64)	しかし、俺はまじめな人間だからね！(p. 67)
山崎	わたしはまじめなんだ。無駄口に興じてはおられん！(p. 44)	散歩する暇がないんだ。わたしはまじめなんだ。(p. 45)	このわたしはまじめなんだ！夢見心地になる暇などありません。(p. 46)	わたしはまじめなんだ。数にはこだわらんだ。(p. 46)	でも、わたしはまじめな人間なんだ！(p. 47)
池澤	私は重要人物だし、くだらぬことに関わっている暇はないんだ。(p. 54)	散歩する時間もなかった。私は重要人物だからな。(p. 56)	だが、重要人物だからな。私には夢なんか見ている暇はない。(p. 56)	私は重要人物だから、計算も厳密でなくてはならない。(p. 56)	しかし私は重要人物だからね！(p. 58)
稲垣	わたしはまじめな人間だからな。油を売ってなんかいられない！(p. 76)	散歩する時間がない。わたしはまじめな人間だからな、このわたしは。(p. 77)	だが、このわたしは、まじめな人間だからな。空想にふけている暇なんぞありはしない。(p. 78)	このわたしは、まじめな人間だからな、数字にうるさいのだ。(p. 78)	だがな、このわたしはまじめな人間だからなあ！(p. 81)
河野	有能な人間だか	なにしろふだん、	だが私は、有能な人	これは大事な仕	でも私は、有能な

	らな、私は。くだらんことにはつきあえない！ (p. 65)	そこらを歩くひまもない。有能な人間だからな、私は。 (p. 66)	間だからな！夢など見てるひまはない (p. 67)	事なんだ、正確にやらんと (p. 67)	人間だからな！ (p. 69)
河原	おれさまはなにしろ忙しいんだ。大事な仕事をしてるまっとうな人間なんだからな。よけいな質問なんぞにかかり合っちゃおれん！ (p. 74)	散歩するひまもありゃしないんだ。なにしろおれさまは大事な仕事をしてるまっとうな人間だからな。 (p. 76)	このおれさまは、大事な仕事をしてるまっとうな人間だからな、夢なんか見てるようなひまはないぞ (p. 76)	おれは大事な仕事をしてるまっとうな人間だからな、数には正確なんだ (p. 77)	だが、なにしろおれさまは、大事な仕事をしてるまっとうな人間だからな (p. 79)
野崎	まじめだからな、わたしは。くだらないおしゃべりにふけてるひまなどない！ (p. 68)	散歩するひまもない。まじめだからな、わたしは。 (p. 69)	でもまじめだからな、わたしは！夢などみてるひまはない (p. 70)	まじめだからな、わたしは。数字にはうるさい (p. 70)	でもまじめだからな、わたしは！ (p. 73)

ここでは「*Je suis sérieux, moi*」というフレーズが4回繰り返され、最後に「*Je suis un homme sérieux!*」という台詞で締め括られる。これがビジネスマンの口癖であることは明らかで、できる限り同じ言い回しを用いて訳すことが要求される。内藤、池澤、河野の3人が【大事な型】、小島、三野、山崎、稲垣、野崎の5人が【まじめな型】で訳しており、河原は一人「大事な仕事をしてるまっとうな人間」とどちらの型も包括する欲張った訳を充てている。

内藤は「*Je suis sérieux, moi*」を「おれはだいじな仕事をしてる」としつつも「*Je suis un homme sérieux!*」では「*homme sérieux*」を「ちゃんとした男」と訳している(7章「いそがしい、いそがしい」は忘れ去られているようだ)。河野は「*Je suis sérieux, moi, je suis précis.*」の箇所でのみ「大事な仕事なんだ」と訳しているが、その他の箇所では「*Je suis sérieux, moi*」を「(私は)有能な人間だからな」と訳している。「有能な」は少しベクトルが異なるが、「大事な仕事を遂行可能な」と読み替えば【大事な型】の系譜に加えても差し支えないだろう。また、そうした「大事な仕事をしている有能な人間」が、池澤流に言えば「重要人物」ということになる。

いずれの場合においても肝心なことは、*sérieux* が常に何か他の事物との比較において用いられているということである。(他の事と比べてより)「大事」な仕事、(他の人と比べてより)「有能」ないし「重要」な人間という風に、*sérieux* という語が用いられるためには、明示されなくともそこに他の「*sérieux* ではない」事物の存在が仄めかされるのである。

一方、【まじめな型】では「まじめ」「まじめな人間」「真面目に働いている」「真剣」などの訳語が充てられているが、これらは *sérieux* に内在する意味であり、被修飾名詞の絶対的な性質を表すに過ぎない。たとえばその星に住むビジネスマンが「まじめな人間」だとして、他にどれだけ同じような「まじめな人間」がいたとしても *sérieux* = 「まじめな」の意味には影響しない。これが相対的に用いられる *sérieux* = 「大事な」との差異である。

筆者がここで【大事な型】の語彙の方がふさわしいと判断する根拠は次の使用箇所にある。

« C'est amusant, pensa le petit prince. C'est assez poétique. Mais ce n'est pas très *sérieux*. »

Le petit prince avait sur les choses *sérieuses* des idées très différentes des idées des grandes personnes.

(p. 52)

内藤：おもしろいな、と王子さまは考えました。詩的といえば詩的だ、でも、だいじなことじゃないや。王子さまは、なにがたいせつかということになると、おとなとは、たいへんちがった考えを持っていました。(p. 64)

小島：おもしろいな、と王子さまは考えました。「かなり詩的な発想だけど、まともには考えられないな」王子さまは何をまともを考えるべきかということについて、おとなたちとはずいぶん違った考えを持っていました。(p. 56)

三野：「愉快なことだね」と王子さまは考えた。「ずいぶん詩的だな。でも、あまりまじめとは言えないや」王子さまは、まじめということについて、おとなたちとはまったく違った考えを持っていたのだ。(p. 68)

山崎：「これは面白い」と、小さな王子さまは思いました。「かなり詩的ではある。でもあまりまじめじゃないな」小さな王子さまは、まじめなことがらについて、大人のひとたちとはまるっきりちがう考え方を持っていたのです。(p. 47)

池澤：それは楽しいな、と王子さまは考えた。なかなか詩的だ。でも、重要なことではないだろう。王子さまは重要ということについて大人とはずいぶん違う考えを持っていた。(p. 58)

稲垣：「おもしろいなあ」と王子さまは思いました。「なかなか詩的じゃないか。でも、とても、真つ当とは思えないな」真つ当ということについて、王子さまはおとなたちとは似ても似つかぬ考えを持っていたのです。(p. 82)

河野：<おもしろいな>と王子さまは思った。<なかなか詩的だな。でもあんまり有能って感じはしないや>王子さまは、有能であること、大事なことについて、おとなとはとてもちがった考えを持っているのだ。(p. 70)

河原：《こりやおもしろいや》、王子さまは思いました。《詩の中の話みたいで、ちょっと夢があるような…ん？ いやいや、そんなことはない。やっぱりあんまりまっとうなこととは言えないな》王子さまは、なにがまっとうかっていうことについては、大人たちとはずいぶんちがった考えを持っていたのです。(p. 80)

野崎：（おもしろいなあ）とちいさな王子は思った。（とてもすてきだぞ。でも、まじめな話とは思えないなあ）ちいさな王子は、なにがまじめなことかについては、おとなたちとずいぶん

ちがう考えをもっていた。(p. 74)

「(自分が管理している)星の数を紙に書いて、その紙を鍵付きの引き出しにしまうんだ¹²」と主張するビジネスマンに対して、それはたしかに «poétique» ではあるが «sérieux» ではないと王子さまが判断する場面である。

適切な訳に関する議論に入る前に、三野「まじめということ」、池澤「重要ということ」、稲垣「真っ当ということ」に共通する「ということ」は誤訳であると言わざるをえないだろう。「être sérieux» あるいは «ce qu'est sérieux» などの訳としては成立しうるが、sérieux の語義が何であるかにかかわらず «les choses sérieuses» を「sérieux ということ」と訳すことは不可能である。

では何と訳すべきか。内藤「なにがたいせつかということ」、小島「何をまともに考えるべきかということ」、河原「なにがまっとうかっていうこと」、野崎「なにがまじめなことか」に表れているように「何が sérieux なのか」という訳がふさわしい。あらかじめ «choses sérieuses» が存在し、それについて大人とは異なる意見を王子さまが持っているのではない。何を «choses sérieuses» とみなすか、その基準が大人たちと王子さまでは異なるのである。

であればこそ、(内藤ただ一人がそうしているように)ここでの sérieux は【大事な型】の語で訳すべきだろう。王子さまはビジネスマンとの会話の最中、しきりに自分の花 «ma fleur» に言及している。

«Moi, si je possède un foulard, je puis le mettre autour de mon cou et l'emporter. Moi, si je possède une fleur, je puis cueillir ma fleur et l'emporter. Mais tu ne peux pas cueillir les étoiles ! (p. 52)

ぼくは、マフラーを持っていたらそれを首に巻いて持ち運べる。ぼくは、花を持っていたらぼくの花を摘んで持ち運べる。でもきみは星を摘んだりできない！

«Moi, dit-il encore, je possède une fleur que j'arrose tous les jours. Je possède trois volcans que je ramone toutes les semaines. Car je ramone aussi celui qui est éteint. On ne sait jamais. C'est utile à mes volcans, et c'est utile à ma fleur, que je les possède. Mais tu n'es pas utile aux étoiles...» (p. 53)

ぼくは花をひとつ所有していて、毎日水をあげている。火山をみつつ所有していて、毎週すずを払っている。死火山も掃除しているからね。何が起こるかわからないから。ぼくが所有していることは、ぼくの火山の役に立っているし、ぼくの花の役にも立っている。でもきみは星の役に立っていない...

星を「所有 (posséder)」し「管理 (gérer)」することを sérieux だと言うビジネスマンに王子さまが反論している場面だが、ここで彼が繰り返し言及し重きを置いているのは対象に「はたらきかける」ことである。マフラー (foulard) や花 (fleur) や火山 (volcan) に対し、ただ所有するだけでなく、使用したり、世話をしたりすること、それがまた対象の「役に立つ」ことが彼にとっては重要なのだ。ただ一方的に所有することが「まじめ」なのではない。相互にはたらきかけ、互いが互いのためにあ

¹² «j'écris sur un petit papier le nombre de mes étoiles. Et puis j'enferme à clef ce papier-là dans un tiroir.» (p. 52)

ることこそが「大事」なのである。

また、「花 (ma fleur)」や「バラ (ma rose)」についての記述は物語の山場と言える 21 章でも *important* とともにより明確に繰り返される。

Bien sûr, ma rose à moi, un passant ordinaire croirait qu'elle vous ressemble. Mais à elle seule elle est plus *importante* que vous toutes, puisque c'est elle que j'ai arrosée. Puisque c'est elle que j'ai mise sous globe. Puisque c'est elle que j'ai abritée par le paravent. Puisque c'est elle dont j'ai tué les chenilles (sauf les deux ou trois pour les papillons). Puisque c'est elle que j'ai écoutée se plaindre, ou se vanter, ou même quelquefois se taire. Puisque c'est ma rose. » (p. 76)

もちろんぼくのバラだって、通りがかりの人から見ればあなたたちと変わらないかもしれない。でも彼女ひとりだけで、あなたたちみんなよりも大切なんだ、だってぼくが水をあげたのは彼女だから。覆いをかぶせてあげたのも彼女だから。風よけを立ててあげたのも彼女だから。ケムシを殺してあげたのも（二、三匹、蝶になるから逃がしてあげたけど）彼女だから。愚痴や自慢話を聞いたり、ときには黙っているのを聴いてあげたのも彼女だから。だってぼくのバラだから。

これは王子さまがバラ園を再訪したとき、そこに咲く五千本のバラに向けた放った言葉である。最初に訪れた際は自分の花と似たバラが無数にあることにショックを受けたものの、キツネと出会った今となっては自分のバラの大切さに気付き、その理由を言明している。王子さま自身は美しいバラの花を眺めることに幸福を感じていたが、それだけでなく花の面倒を見て、彼女のためにあれこれ世話を焼くことでお互いが特別な存在になる。この台詞の直前で五千本のバラに「あなたたちは全然ぼくのバラに似ていない、あなたたちはまだ何でもない¹³」「誰もあなたたちを飼い慣らしていないし、あなたたちは誰も飼い慣らしていない¹⁴」と言ったのはそのためである。

Et il revint vers le renard :

« Adieu, dit-il...

- Adieu, dit le renard. Voici mon secret. Il est très simple : on ne voit bien qu'avec le cœur. *L'essentiel* est invisible pour les yeux.
- *L'essentiel* est invisible pour les yeux, répéta le petit prince, afin de se souvenir.
- C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si *importante*.
- C'est le temps que j'ai perdu pour ma rose..., fit le petit prince, afin de se souvenir.
- Les hommes ont oublié cette vérité, dit le renard. Mais tu ne dois pas l'oublier. Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose...
- Je suis responsable de ma rose... », répéta le petit prince, afin de se souvenir. (p. 76)

そして彼はキツネのもとに戻ってきた。

¹³ « Vous n'êtes pas du tout semblables à ma rose, vous n'êtes rien encore. » (p. 76)

¹⁴ « Personne ne vous a apprivoisées et vous n'avez apprivoisé personne. » (p. 76)

「さようなら」彼は言った...

「さようなら」キツネは言った。「これがおれの秘密だ。とても簡単なことだよ。心で見ないとよく見えない。肝心なことは、目には見えないんだ」

「肝心なことは、目には見えない」忘れないように王子さまは繰り返した。

「きみがきみのバラのために費やした時間が、きみのバラをそれほど大切なものにするんだ」

「ぼくがぼくのバラのために費やした時間が...」王子さまは忘れないように言った。

「人間たちはこの真理を忘れてしまった」キツネは言った。「でもきみは忘れちゃいけないよ。きみは、きみが飼い慣らしたものにずっと責任を持つんだ。きみはきみのバラに責任があるんだよ...」

「ぼくはぼくのバラに責任がある...」忘れないよう、王子さまは繰り返した。

実際、キツネの言説は彼の言うように「とても簡単なこと」である。お互いのために「時間を費やす (perdre du temps) 」ことが互いを「飼い慣らす (s'appriivoiser) 」ことであり、その結果双方が双方に対し「責任を持つ (devenir responsable) 」。そうしてできあがる関係性が互いを互いにとって大切 (important) にするのである。また、その大切さの核心、深部であるところ (essentiel) は目には見えない。essentiel という形容詞の使用回数は sérieux, important に比べごくわずかだが、24章のパイロットの台詞に « Ce que je vois là n'est qu'une écorce. Le plus important est invisible... (いま僕に見えているのは、表面でしかないんだ。いちばん大切なものは目に見えない...) » (p. 82) とあることから、essentiel = le plus important と読み替えることが許容されるだろう。

essentiel が定冠詞を伴って « l'essentiel » という名詞形で使用される場面が 21章以外にも一箇所だけ、4章の中にある。

Si je vous ai raconté ces détails sur l'astéroïde B 612 et si je vous ai confié son numéro, c'est à cause des grandes personnes. Les grandes personnes aiment les chiffres. Quand vous leur parlez d'un nouvel ami, elles ne vous questionnent jamais sur l'essentiel. Elles ne vous disent jamais : « Quel est le son de sa voix ? Quels sont les jeux qu'il préfère ? Est-ce qu'il collectionne les papillons ? » Elles vous demandent : « Quel âge a-t-il ? Combien a-t-il de frères ? Combien pèse-t-il ? Combien gagne son père ? » Alors seulement elles croient le connaître. (p. 23)

僕がこんなに詳しく小惑星 B612 について話したり、その番号をはっきり言ったりしたのは、ぜんぶ大人たちのためだ。大人は数字が好物だから。もし君に新しい友達ができて、そのことを彼らに話しても、肝心なことは何も聞いちゃくれない。「その子はどんな声をしているの？」とか「好きな遊びは？」とか「蝶を収集しているの？」なんて言ってくれるはずはなく、「その子は何歳？」「兄弟は何人？」「体重は？」「お父さんの収入は？」とだけ聞いて、その子を知った気になる。

ここで言う「肝心な (essentiel = le plus important) こと」とは、新しくできた友達がどんな声をしているのか、どんな遊びが好きなのかなど身体的具体性を兼ね備えたものである。そうした質問を大人たちはせず、年齢や収入など数字で表される観念的具體性に執着する。この抜粋部分は王子さまによ

るものではなく（王子さまとの出会い、離別を経た後の）パイロットによる語りであるが、*essentiel* にまつわるキツネの「秘密」が王子さまを通してパイロットの血肉となっていると考えられる。「*l'essentiel est invisible pour les yeux*（肝心なことは、目には見えない）」とはつまり、大事なことは（「ビジネスマン」をはじめとする大人の好物である）数字によって観念的、間接的に「見る」ことのできるものではなく、自らの身体を投じた直接性の中でいわば「さわる」ことしかできないのであり、そのために「心で見ると」必要があるということなのだろう。

ここで一つの仮説を立てることができる。作中 *sérieux* が王子さまによって *important* の同義語として用いられていたことを考えれば、*essentiel* = *le plus sérieux* という解釈も可能である。この「*le plus*」という形は文法的には最上級を表し、比較対象の存在を暗示する。つまり *Le Petit Prince* という作品はかなり広範囲に亘って「何をより大事 (= *sérieux, important, essentiel*) と捉えるか」という問いを展開しており、子どもと大人で答えが分かれそうな事柄には両義的に *sérieux* を、子どもだけが「大事」だと知っていることには一義的に *important, essentiel* を使っているのではないか。

sérieux の使用は 13 章を最後にしばらく空白地帯を作るが、22 章にこのような記述がある。

« Les enfants seuls savent ce qu'ils cherchent, fit le petit prince. Ils perdent du temps pour une poupée de chiffons, et elle devient très *importante*, et si on la leur enlève, ils pleurent... (p. 79)

「子どもたちだけが、自分の探しているものを知っている」王子さまは言った。「ぼろきれの人形ひとつのために時間を費やして、だから人形はとても大切なものになる。もし取り上げたら、子どもは泣いてしまうんだ...」

自ら時間を費やしたものだけが大切なものになるということを「子どもたちだけが知っている」。何が *important* かを知らない大人は当然、何が本当に *sérieux* かもわからない。だからパイロットは「*Je m'occupe, moi, de choses sérieuses!*」という一言で王子さまを落胆させたのである。しかし彼はその後、王子さまとの交流を通して *sérieux* の意味を取り戻していく。作中、彼一人だけが「子ども」と「大人」の境界を（逆方向に）跨ぎ、「*choses sérieuses*」に関する考えを改めるのだ。

5) 26 章 —— le petit prince sérieux

物語の終盤に入り王子さまとの別れが近づく場面で再び、眠っていた *sérieux* が使用される。

Je sentais bien qu'il se passait quelque chose d'extraordinaire. Je le serrais dans les bras comme un petit enfant, et cependant il me semblait qu'il coulait verticalement dans un abîme sans que je puisse rien pour le retenir...

Il avait le regard *sérieux*, perdu très loin :

« J'ai ton mouton. Et j'ai la caisse pour le mouton. Et j'ai la muselière... » (p. 90)

内藤：王子さまは、遠いところで迷子にでもなったように、きつとした目をしていました。(p. 117)

- 小島：彼の真剣な視線は、はるか遠くに注がれていました。(p. 102)
- 三野：王子さまのまなざしは、真剣そのもので、はるか彼方へと注がれていた。(p. 124)
- 山崎：彼は真剣に、はるかかあなたに視線をさまよわせていました。(p. 87)
- 池澤：彼はとても真剣な、遠く消えゆくようなまなざしをしていた (p. 105)
- 稲垣：王子さまは真剣な目をして、とても遠くをじっと見ていました。(p. 151)
- 河野：王子さまのひたむきなまなざしは、はるかなところをさまよっている。(p. 129)
- 河原：彼のただならぬ視線は、まるで遠い遠い一点をじっと見つめているかのようです。(p. 147)
- 野崎：王子は真剣な目つきで、どこか遠くを見つめていた。(p. 133)

Et il rit encore.

« Ce sera comme si je t'avais donné, au lieu d'étoiles, des tas de petits grelots qui savent rire...»

Et il rit encore. Puis il redevint sérieux :

« Cette nuit... tu sais... ne viens pas.

– Je ne te quitterai pas. (p. 92)

- 内藤：王子さまは、また笑いました。が、やがてまた、まじめな顔になっていました。(p. 120)
- 小島：そう言って、彼はまた笑いました。それから真顔に戻ってこう言いました。(p. 105)
- 三野：彼は、また笑った。それから、まじめな表情にもどって言った。(p. 128)
- 山崎：こう言って彼はまたまた笑い声を立てました。それから真顔にもどりました。(p. 90)
- 池澤：彼はもう1度だけ笑った。それからまた真剣な顔に戻った (p. 107)
- 稲垣：そう言うなり、王子さまはまたニッコリと笑いました。それから、王子さまは真顔に戻って、(p. 156)
- 河野：王子さまは、また笑った。それから真顔に戻った。(p. 134)
- 河原：そう言って彼はまた笑います。——しかし、こんどはすぐ真剣な表情にもどると、こう言うのでした。(p. 152)
- 野崎：そして王子はまた笑った。それからまじめな顔にもどっていった。(p. 138)

以上二箇所「*sérieux*」には共通点がある。それはこの語の被修飾名詞が王子さま自身（あるいは彼に属するもの）であるということだ。13章までに計19回使用された *sérieux* はいずれも「*excuse*」, 「*raisons*」, 「*gens*」, 「*homme*」, 「*chose(s)*」などの名詞とともに使用され、王子さま自身を表す「*le petit prince*」などの語が被修飾語になることはなかった。そして9人の訳者それぞれの訳を見て明らかのように、この場面で【大事な型】の語を用いた者はおらず、みな一様に（「ただならぬ」などいくつかの例外を除いて）【まじめな型】で訳している。これは何を意味するだろうか。21章でのキツネとの邂逅を経て、*important* と *essentiel* 二つのキーワードにまつわる「秘密」が読者に対し明らかにされた。これを境に、（著者自身にその意図があったか定かではないが）それまで「子どもにとって大事なもの」と「大人にとって大事なもの」どちらにも使われていた *sérieux* は両義性から解放され、その役目を終えたのではないか。そして【大事な】という意味を *important, essentiel* の二語に託した *sérieux* は【まじめな】という意味で限定的に使用されるようになり、首尾一貫「子ども」の立場にあり続け、

両義性の外側にいた王子さまの視線 « le regard » と、彼自身を表す « il » をはじめて修飾可能になったのである。

4. 結びにかえて

Le Petit Prince の世界に筆者がはじめて触れたのはまだ自分がフランス語を勉強すると考えてもいなかった頃、池澤夏樹の翻訳によってであった。その後、作品をフランス語で理解し、また自ら翻訳する過程で、先達がどのような道を進んできたのかに関心を抱いた。たった一語 *sérieux* をめぐっての考察は、それに訳語として充てられるいくつかの日本語がかろうじて築いていた城を掻き崩し、取り上げた9人の訳者が渡した「翻訳」という名の橋をむしろ一つずつ撤去していくような寂寥感を伴った。しかし言語を異にする語同士が会うのは、そもそも人工的な橋の上ではない。単語という形を得る前の概念の海で、そこへ潜ることを許された者だけが、語と語の原形が束の間すれ違うのを目の当たりにするのである。その現場を記述するのにどれだけの語が必要になるかはわからないが、海の中の様子を少しでも描けたことを願ってやまない。